



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道東部の続縄文時代石器群
Author(s)	高倉, 純
Citation	北方人文研究, 2, 23-42
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38237
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_p23-42.pdf



北海道東部の続縄文時代石器群

高 倉 純

北海道大学大学院文学研究科

I. はじめに

続縄文時代とは、本州の弥生・古墳時代に併行する時期の北海道を対象に設定された独自の時代区分である。北海道の自然環境に適応した狩猟・採集を基本的な生業形態としつつも、周辺地域（とりわけ本州）との間で結ばれたさまざまな社会的関係の変化に伴って、縄文時代の延長線上にあった社会システムは、続縄文時代の半ば頃から根底的な変容を見せはじめる。続縄文時代後半期に想定されている鉄器の大量流入は、そうした変容を端的に反映した現象といえる。こうした社会システムの変容は、擦文以降に進行した歴史的展開の起点をなすものと予測され、その要因や効果を探ることは、北海道の考古学研究においてきわめて重要な検討課題と考えられよう。

北海道の続縄文時代に関しては、これまでさまざまな考古資料を対象に数多くの基礎的・経験的な研究が積み重ねられてきた。そのなかでもとりわけ石器資料の検討は、腐食・再利用の頻度や重要性等の理由でかつての実態をほとんど反映していないと考えられる鉄器資料に代わって、鉄器化の問題を解明する鍵とされてきただけに、より多くの注目を集めてきた（例えば木村 1976、上野 1982、横山 1988、仙庭 1998、鈴木信 2004）。

筆者は、続縄文時代の石器群に関して、従来から取り組まれてきた器種組成の変遷という視点だけでなく、石器群のライフヒストリーに着眼する視点を提示し（高倉 2005a）、石狩低地帯北部の石器群を具体的な検討対象として、その時間的変遷をトレースする作業を試みた（高倉 2006a）。それにより、器種組成や石器石材、石器製作工程・方法の相互が対応しながら変化をみせている実態が明らかにされた。また、石器群を構成する変形過程の系列の消長を検討することは、鉄器化の問題を論じるうえでも有効な見通しを示しうることを論じた（高倉 2008）。

以上のような続縄文時代石器群の研究、とくに器種組成や石器石材組成、あるいは石器群のライフヒストリーを取り扱っているものに関しては、地域を限っていない場合でも、相対的に多くの発掘資料が蓄積されている北海道東部を中心に議論が進められてきた傾向は否定できない。そのため、地域間の比較としては、個別器種の有無ないしは多寡への言及がなされてきた程度であり、石器群全体に対して系統的に議論が掘り下げられてきたというわけではない。続縄文時代研究の全体的な脈絡においては、その前半期から後半期にかけての地域間関係の変容²⁾が大きな論点となっていることを鑑みると、石器群研究においても早急に地域間での通時的な比較をおこない、地域間の関係の検証を試みる必要があることがわかる。

もちろん、資料的な制約が大きかったからこそ、これまで検討が具体的には進められてこなかっ

たのであろう。議論の目的にとって有意な程度の時間の解像度を有し、なおかつ石器群のバリエーションをある程度網羅する量的にまとまった資料体の蓄積が、北海道東部や北部、南部において相対的に乏しかったことは事実である。そうした状況は、現在でも大きく変わっていない。

しかし、近年では、北海道東部においていくつかの注目すべき新資料の検出がなされている。いまださまざまな資料的欠落を抱え込んでいるにせよ、現時点で得られている資料にもとづいて、北海道東部のなかでの縄文時代石器群の器種組成や石器石材組成、ライフヒストリーに関する時間的変遷をトレースしていく作業が、次第に可能な状況となりつつある。石器群の地域間比較をおこない、その相互関係を石器という視点から俯瞰するためには、基礎的な問題の整理と現状での見通しの把握が求められているといえよう。

本稿では、以上のような現状をふまえ、北海道東部を検討対象の地域として取り上げ、縄文時代石器群の時間的変遷に関する基礎的な整理と今後の比較研究のための問題点の摘出を試みていくことにしたい。

II. 検討方針と資料体

本稿では、石狩低地帯北部での石器群の変遷を議論(高倉 2006a: 149)する際に採用した縄文時代の五期区分に対応した段階設定をおこない、以下の議論を進めていきたい。地域間での土器型式の併行関係に関する理解は、当該問題に関する研究成果(例えば鈴木信 2003、熊本 2003)に依拠する。Ⅰ期は、釧路地域ではフシココタン下層式・興津式、網走地域では栄浦第二・第一段階の土器群と元町2式の段階に相当する。Ⅱ期は、釧路地域は下田ノ沢Ⅰ式、網走地域は宇津内Ⅱa式(ⅡaⅠ式・ⅡaⅡ式)の段階に相当する。Ⅲ期は、下田ノ沢Ⅱ式や宇津内Ⅱb式(ⅡbⅠ式・ⅡbⅡ式)、そして後北C1式の段階とする。Ⅳ期は後北C2-D式期、Ⅴ期は北大式期の段階である。このうちⅠ期からⅢ期までを縄文時代の前半期、Ⅳ期とⅤ期を縄文時代の後半期とする。なお、北海道東部のなかの地域区分として、ここでは知床半島から石狩山地にかけてのラインを境に、その南側を釧路地域、北側を網走地域として分ける。

検討対象とする資料体の選択基準について概述しておきたい。

ライフヒストリーを含めた石器群の全容を明らかにし、石材消費形態(高倉 2003)の復元までも射程におさめるならば、遺跡の形成過程から判断して³⁾、ある特定の時期に残されたと考えられる一定の量的まとまりをもつ石器群を資料体とする必要がある。帰属時期の認定は、石器群に共伴する土器群の型式にもとづく。ここでいう“ある特定の時期”の時間幅とは、本稿の目的に照らし合わせるならば、上述した縄文時代の五期区分におけるそれぞれの段階が有する時間幅程度のものと考えておいてよい。

いわゆる遺構外の包含層から出土した資料群に関しては、特定時期への帰属が層位的ないしは平面的に検証できず、土器型式からみて複数時期にまたがった資料群(縄文や擦文、オホーツク等の時期に帰属する資料も含む)が混在していると判断される場合が多い。そうした事例のうち、共伴する土器型式のなかで量的に主体となるものが明確であれば、それを代表させて帰属時期を認定し、検討の対象に含めることとした。

また、前稿(高倉 2006a: 148-9)でも触れたが、石器群の器種・石器石材組成やライフヒストリーを確認するためには、石器群のバリエーションをある程度反映している、量的にまとまった資料体を取り上げる必要がある。そのため、竪穴住居址の床面から検出された、帰属時期の判定が可能で

一括性の高い資料体については、検討の対象として取り上げる。しかし、遺跡内から検出された遺構の主体が墓坑で、主に墓域として利用されていたと考えられる遺跡の石器群に関しては、組成の偏り、剥片・碎片・石核等の欠如が予測されることから、検討対象には含めていない。ただし、墓坑出土資料でも所属時期が明確なものについては、時期的な傾向を確認するために言及する場合がある。

以上から、釧路地域では以下の石器群を取り上げて議論をおこなう。遺跡の位置については図1に示す。

①白糠町上茶路遺跡（立田編 2007）

河川周辺の氾濫原に遺跡が立地しており、氾濫原堆積物中に遺物・遺構が包含されている。炉址が多数検出されている。遺跡の形成時期は、縄文時代晩期後葉の緑ヶ岡式期から続縄文時代のⅠ期にかけてである。緑ヶ岡式期のものも含むことになるが、本稿では包含層から出土した石器群を検討対象とする。

②釧路市興津遺跡（澤編 1978、1979、澤・西編 1977）

海岸段丘上に立地している。Ⅲ層上部が続縄文時代資料群の帰属層位である。竪穴住居址や墓坑と考えられる土坑が多数検出されている。Ⅰ期～Ⅲ期が遺跡利用の主体となる時期であったとみられる。Ⅰ期～Ⅲ期に帰属する竪穴住居址床面およびⅢ層上部から出土した石器群を検討対象とする。

③釧路市三津浦遺跡（澤・西編 1976）

海岸段丘上に立地している。Ⅴa・b・c層が続縄文時代資料群の帰属層位である。竪穴住居址や炉址、土坑、配石といった遺構が検出されている。Ⅱ期～Ⅲ期が遺跡利用の主体となる時期であったと考えられる。竪穴住居址床面およびⅤa・b・c層から出土した石器群を検討対象とする。

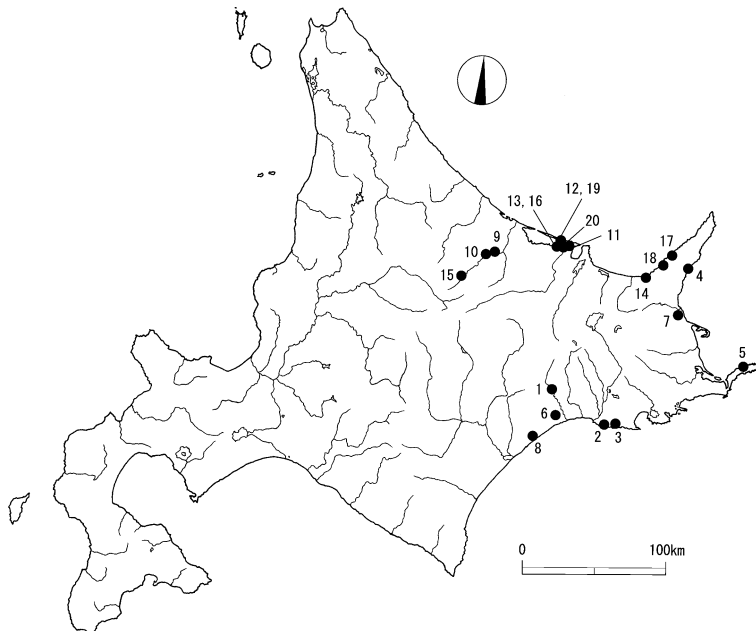


図1 検討対象の遺跡の位置（番号は本文中の遺跡の番号と対応する）

④羅臼町幾田遺跡（宇田川編 1975）

海岸段丘上に立地している。続縄文時代の竪穴住居址が多数検出されている。Ⅱ期～Ⅲ期が遺跡利用の主体となる時期であったと考えられる。Ⅱ期～Ⅲ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑤根室市コタンケシ遺跡（川上編 1994）

海岸段丘上に立地している。Ⅲ期に帰属する竪穴住居址が1基検出されている。この竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑥白糠町河原遺跡（富水・澤 1966）

サチホロ川と古川にはさまれた河岸段丘上に立地する。遺構は検出されていない。2層からⅣ期の遺物が出土しているが、出土点数は多くない。しかし、北海道東部におけるⅣ期の単純遺跡として重要であるため検討対象とした。

⑦標津町伊茶仁チシネ第1竪穴群遺跡（梶田編 1982、1992）

伊茶仁川支流のアッチャウス川左岸の扇状地末端に立地している。1981年の調査ではⅣ期に帰属する竪穴住居址が検出された。1988年の調査では3層からⅣ期に属する多数の炉址・土坑が検出されている。ここでは1988年度の調査から得られた石器群を検討対象とする。

⑧釧路市音別町ノトロ岬遺跡（山本編 1984）

海岸段丘上に立地している。炉址や墓坑と考えられる土坑が多数検出されている。Ⅴ期に属する石器群がⅢ層から検出されており、それらを検討対象とする。

網走地域に関しては以下の石器群を取り上げる。

⑨遠軽町新野上2遺跡（高橋和他 2005）

河岸段丘上に立地している。Ⅱ層が続縄文時代の遺物・遺構包含層である。遺構としては土坑が多数検出されている。土器の出土量からみてⅡ期～Ⅲ期が遺跡利用の主体となる時期であったと考えられる。Ⅱ層から出土している石器群を検討対象とする。

⑩遠軽町栄野1遺跡（高橋和他 2005）

湧別川によって形成された河岸段丘上に立地している。Ⅱ層が続縄文時代の遺物包含層である。Ⅲ期が遺跡利用の主体となる時期であったと考えられる。Ⅱ層から出土している石器群を検討対象とする。

⑪北見市常呂町 TK 67 遺跡（武田編 1988）

湧別川によって形成された河岸段丘上に立地している。多時期にわたって利用されている遺跡であるが、ここではⅡ～Ⅲ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑫北見市常呂町栄浦第二遺跡（東京大学考古学研究室編 1972、武田編 1995）

砂丘上に立地している。多時期にわたって利用されていた遺跡であるが、ここではⅡ～Ⅲ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑬北見市常呂町岐阜第三遺跡（東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1977）

段丘上に立地している。多時期にわたって利用されていた遺跡であるが、ここではⅡ～Ⅲ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑭斜里町尾河台地遺跡（金盛他 1983）

海岸砂丘上に立地している。Ⅱ～Ⅲに属する多数の竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑮遠軽町旧白滝8遺跡（高橋和他 2004）

幌加湧別川によって形成された河岸段丘上に立地している。黒曜石の産出地の近傍に位置している。石器群との関係からみて、Ⅲ期もしくはそれ以前の続縄文時代に属すると考えられる石器群がⅠb層から、Ⅲ期に属する石器群がⅠa層から出土しており、それらを検討対象とする。

⑩北見市常呂町岐阜第二遺跡（東京大学考古学研究室編 1972）

段丘上に立地している。多時期にわたって利用されていた遺跡であるが、ここではⅢ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑪斜里町オンネベツ川西側台地遺跡（松田 1993）

海岸段丘上に立地している。続縄文時代前半期の多時期にわたって利用されていた遺跡であるが、ここではⅢ期に属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑫斜里町オシャマップ川遺跡（松田他 1995）

海岸段丘上に立地している。Ⅱ期からⅣ期まで利用されていた遺跡であるが、ここではⅢ期に属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑬北見市常呂町柴浦第一遺跡（東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1985、武田編 1995）

砂丘上に立地している。多時期にわたって利用されていた遺跡であるが、ここではⅡ～Ⅳ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。

⑭北見市常呂町常呂川河口遺跡（武田編 1996、2000、2002、2004、2005、2006、2007）

常呂川の低位河岸段丘ならびに氾濫原に遺跡は立地している。多時期にわたって利用されていた遺跡だが、ここではⅡ～Ⅳ期に帰属する竪穴住居址床面から出土した石器群を検討対象とする。なお、本稿の目的を鑑み、以下では石製の装身具については取り上げないことをお断りしておく。

Ⅲ. 器種組成と石器石材組成の変遷

Ⅲa. 器種組成の変遷

北海道東部の続縄文時代石器群においては、石鏃、尖頭器、両面調整石器、有柄石器、石匙、削器、搔器、石錐、楔形石器、磨製石斧、礫石器類（敲石、磨石、石皿、台石、砥石、石錘等）といった器種が認められる⁴⁾。楔形石器に関しては、これまでの遺跡報告書のなかであまり注意されてこなかったが、筆者が実見した限りでは、多くの石器群において組成が確認できる。

対象とする資料体の一括性や由来（包含層資料あるいは遺構出土資料なのか）が均質・同一ではないため、また器種ごとの出土点数が提示されている報告書がほとんどないため、定量的な比較はできない。定性的なレベルで、“繰り返しの遺跡でも安定して組成が認められるか否か”を比較するならば、Ⅰ期からⅢ期までは器種組成に大きな変化が認められない。各石器群では多少の偏りがありながらも、上述した器種のほとんどが確認されている（図2）。かつて澤（1974：234）は、Ⅱ期以降「有柄の靴形石匙とよばれるナイフ」がなくなると指摘した。有柄石器や石匙の量比は、Ⅲ期になると減少していることは確かであるが、興津遺跡の第1・7号住居址や常呂川河口遺跡ピット46・371a・1350等でⅢ期の土器群に共伴する有柄石器の出土事例が報告されており、組成から消失してしまったわけではない。また、Ⅲ期の後北C1式期になると搔器のなかでも円形搔器、薄手で細身の石鏃の出現が認められ、Ⅳ期ではそれが引き続き増加していくという傾向が認められる。

北海道中部の器種組成と比較すると、北海道東部では尖頭器や両面調整石器、両面調整されている有柄石器の点数の多さがとくに注目される。北海道中部との違いと比較すると、釧路地域と網走地域との間での差異は、器種内での形態の変異にいくつかの異なる傾向がみられる程度であり、そ

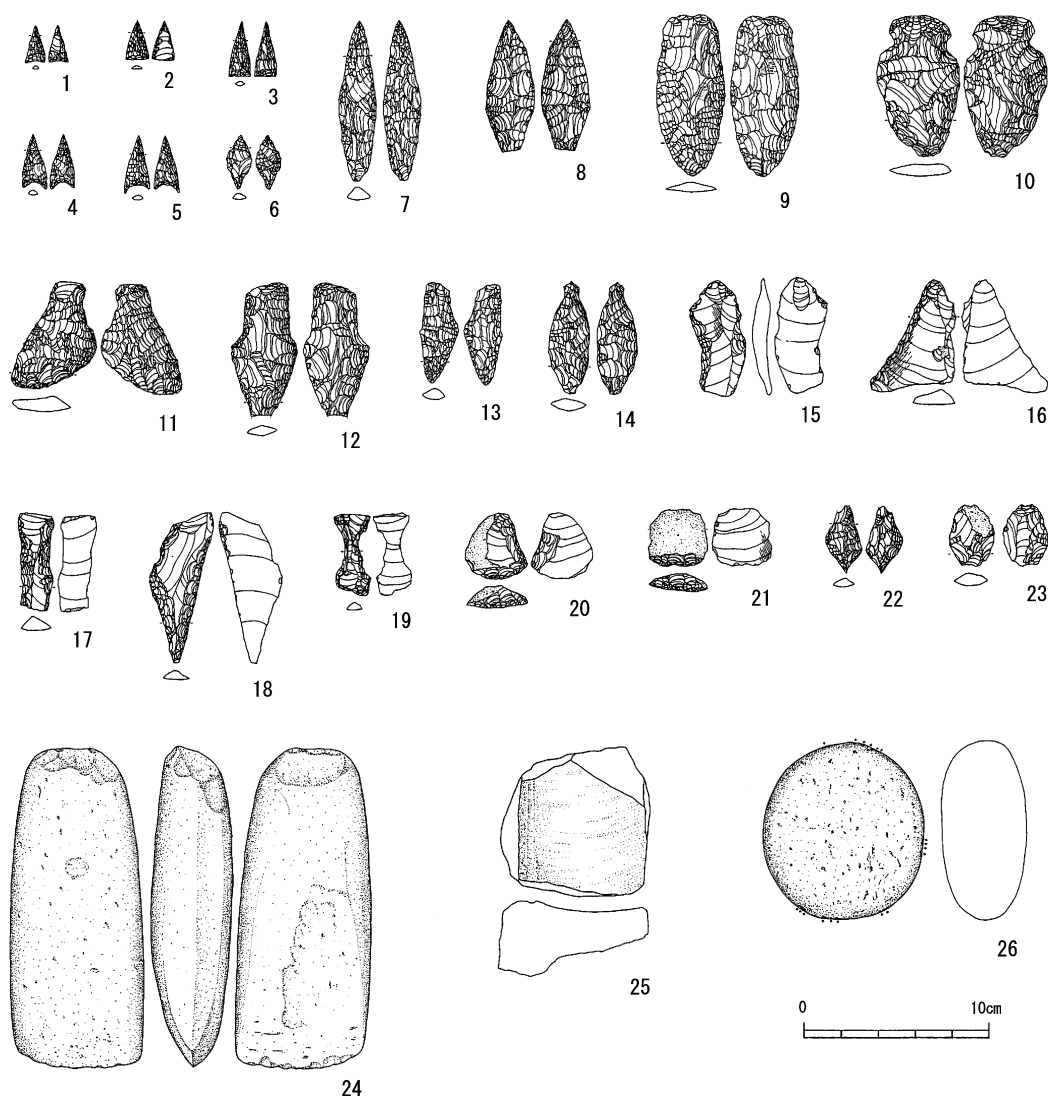


図2 続縄文時代前半期石器群を構成する器種

興津遺跡Ⅲ層上部出土石器群(1～6：石鏃、7・8：尖頭器、9：両面調整石器、10～13：有柄石器、14：石匙、15～19：削器、20・21：搔器、22：石錐、23：楔形石器、24：磨製石斧、25：砥石、26：敲石)

れ程顕著なものは見出せない。

Ⅳ期になると器種組成は変化をみせる。一括資料としてⅣ期の石器群が得られている河原遺跡や伊茶仁チシネ第1竪穴群遺跡では、Ⅲ期の下田ノ沢Ⅱ式・宇津内Ⅱb式期まではそれ程多くなかった搔器の組成が多く認められるようになり⁹⁾、それに加えて石鏃、削器、楔形石器、磨製石斧、礫石器類の組成が認められる。一方で、Ⅲ期までは組成の主体をしめていた尖頭器や両面調整石器、有柄石器、そして石匙、石錐等の組成が著しく減少もしくは消失している(図3)。すでに釧路地域の資料を対象として澤四郎(1974：234)によって指摘されているこうした傾向は、Ⅳ期に属する竪穴住

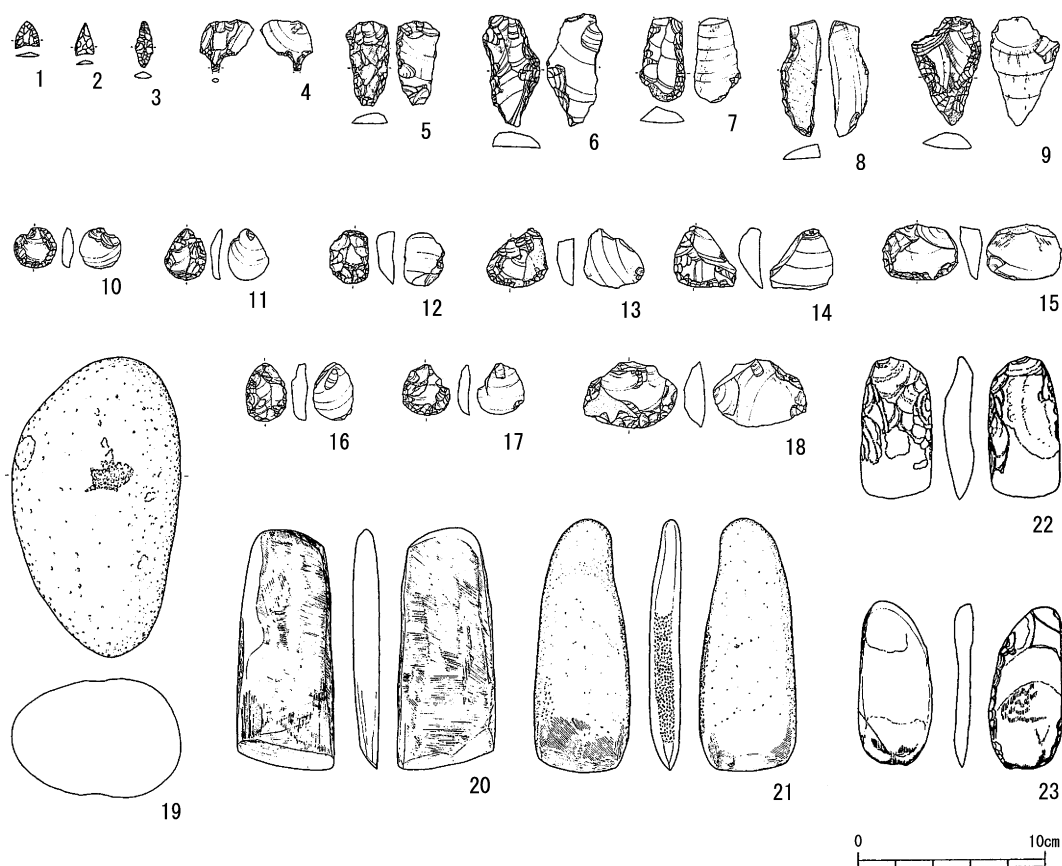


図3 続縄文時代後半期(Ⅳ期)石器群を構成する器種

伊茶仁チシネ第1 竪穴群遺跡3 層出土石器群(1~3: 石鏃、4: 石錐、5~9: 削器、10~18: 搔器、19: 凹石、20~23: 磨製石斧)

居址もしくは竪穴住居の窪みを利用した生活面(石井 1998: 16)が検出されている柴浦第一遺跡(4 A 号竪穴)や常呂川河口遺跡(57・69・70・72・149 号竪穴、武田 2006: 92-4)の床面(もしくは窪みのなかの生活面)出土遺物においても確認することができる⁶⁾。

V 期にいたると、礫石器類を除けば搔器と楔形石器のみの組成が一般的になるようである。それ以外の剥片石器としては、わずかに石錐の組成が認められるのみである。磨製石斧も認められない(図4)。

器種組成の変遷について表1にまとめた。Ⅳ期からⅤ期にかけて、それまでの器種組成を構成していたさまざまな器種が消失していることは明らかであろう。こうした傾向は、先行諸研究によって把握(例えば木村 1976、上野 1982)されている、続縄文時代前半と後半とでの器種組成の大きな差異という指摘に整合するものといえる。北海道中部をはじめとする他地域で把握されてきた傾向が北海道東部においても確認できた、ということになる。

続縄文時代の前半期と後半期での器種組成の変化のプロセスを考察するためには、とりわけⅢ期に属する石器群の位置づけが重要な意味をもつことになる。Ⅲ期のなかでも下田ノ沢Ⅱ式土器や宇

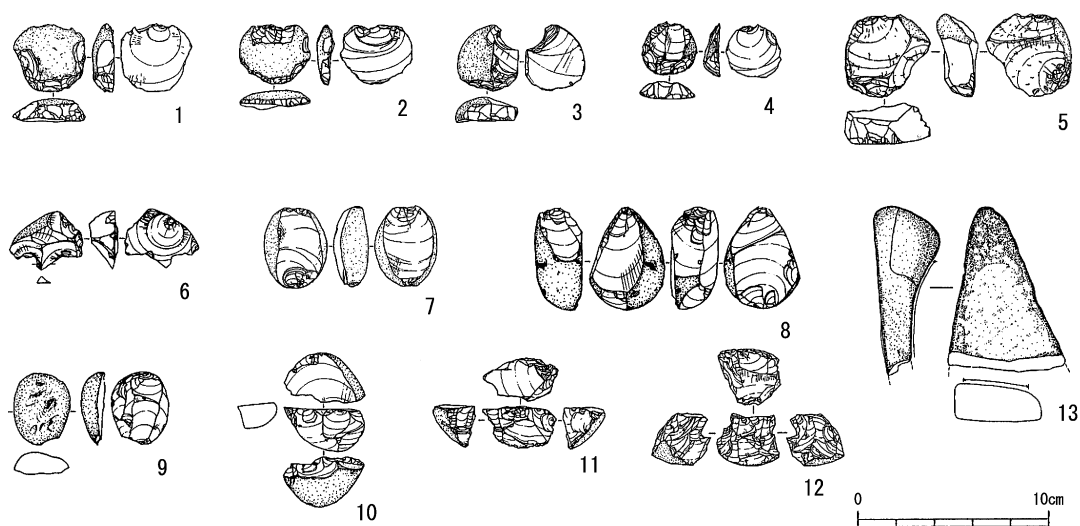


図4 続縄文時代後半期（V期）石器群を構成する器種
ノトロ岬遺跡出土石器群（1～5：搔器、6：石錐、7～9：楔形石器、10～12：石核、13：台石）

表1 器種組成の変遷

	石鏃	尖頭器	両面調整石器	有柄石器	石匙	削器	搔器	石錐	楔形石器	磨製石斧	礫石器類
I期	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
II期	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
III期	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●
IV期	●	○	○			●	●	○	●	●	●
V期							●	○	●		●

● 各石器群で安定して組成する

○ 各石器群での組成が僅少もしくは認められない場合がある

津内IIb式土器に伴う資料体は、とくに堅穴住居址の床面からの出土石器群として、これまで比較的
多く確認されてきた。しかし、後北C1式土器が主体となって確認されている遺跡や遺構は僅少で
あった。栄浦第一遺跡の7号堅穴のように、この時期の堅穴住居址はすでに確認されていたが、床
面出土というかたちで土器との共伴関係が把握された石器はごくわずかであったため、その実態は
不明瞭なままであった。

近年、旧白滝8遺跡Ia層から後北C1式土器に伴うと考えられる石器群が一括して検出された
のは、注目すべきことである。両面調整石器を中心に構成される器種組成は、後述する遺跡の性格
という問題を差し引いたとしても、北海道東部のI期～II期の石器群、そしてIII期に帰属する下田
ノ沢II式土器や宇津内IIb式土器に伴う石器群との間に、多くの共通点を有するものである⁷⁾。こう
した傾向は、後北C1式期にはすでに両面調整石器、尖頭器、有柄石器の組成がほとんど消失してし
まっている石狩低地帯北部の様態（加藤 1992：442、鈴木信 2004：67、高倉 2006a：162）とは、
異なるあり方を示しているといえる。このことから、続縄文時代前半期に特有の器種組成からの変
化が、地域間では若干の時間差をおいて起こっていたことがわかる。

IIIb. 石器石材組成の変遷

次に、北海道東部の続縄文時代石器群における石器石材組成についてみていく。

北海道東部の続縄文時代石器群の剥片石器において、通時的に最も多く利用されているのは黒曜石である。硬質頁岩・メノウの利用も遺構によっては多出している事例（常呂川河口遺跡ピット 328 等）があるが、総じて少量の利用が確認されるにとどまっている。それらが石狩低地帯で確認（高倉 2005a）されているほどの割合を示すことはない。釧路地域では白糠丘陵東南縁部に、網走地域では常呂川流域の北見市周辺や斜里町周辺に、石器石材に利用できるだけの大きさ・石質の硬質頁岩の産出が確認されているだけに（例えば高倉 2005b）、それらの利用が低調であるのは注目すべきことである。斜里町のオシャマップ川遺跡は、報告書（松田他 1995：7）でも指摘されているように、遺跡の近傍に硬質頁岩を産出する越川層が分布しているが、石器群で利用されている石器石材の主体は黒曜石であった。オネベツ川西側台地遺跡の竪穴住居址から出土した石器群も含め、斜里町域の遺跡からは、他地域よりも硬質頁岩を用いた石器がやや多く確認できるが、上述の傾向を覆すほどのものではない。

黒曜石・硬質頁岩以外の石材としては、安山岩やチャート、粘板岩等の利用がごくわずかに認められる。黒曜石以外の石材が利用される器種としては、有柄石器や石匙、削器等のような相対的に大形の石器があげられる。

黒曜石に関しては、比較的多くの資料で自然面をとどめているため、その観察から原石形状の推定をおこなうことが可能である。Ⅰ期からⅡ期までの石器群では、長径 10 cm をこす大形の岩屑や角礫、転礫の利用が認められるのに対し、Ⅲ期以降、転礫利用の比率が高まるようになる⁸⁾。Ⅳ期の石器群では、伊茶仁チシネ第 1 竪穴群遺跡第 3 層出土石器群が示すように、長径 10 cm もしくはそれ以下のサイズの転礫利用の比率が圧倒的に高くなっていると考えられる。Ⅴ期に関しては、ノトロ岬遺跡や阿寒町シュンクシタカラ遺跡（岡崎他 1963）からの出土資料でも明らかのように、利用されている大半の黒曜石は小形の転礫である。この変化は、黒曜石の採集ゾーンの変化（河川の上流域を含むもの→河川の中・下流域）を反映しているものと考えられる。

黒曜石の産出地に関する分析データの蓄積は、残念ながらあまり進んでいない。釧路地域における続縄文時代前半の段階の石器群で利用されている黒曜石は、三津浦遺跡や興津遺跡の出土石器群に対する肉眼観察の結果にもとづけば、より大形の両面調整石器や尖頭器、有柄石器、削器等には、球果を含まず、部分的に白色の流理構造が認められる岩屑・角礫が原材として利用されている場合が多い。それらには、置戸産に由来するものが多く含まれていると推定される。一方、小形の石鏃や揉錐器、楔形石器には、異なる石質のものが多く利用される傾向が認められる。今後、この観察・推定に関しては、自然科学的な産出地推定分析の体系的な実施によって、その妥当性を検証する必要があるだろう。

網走地域では、常呂川河口遺跡において出土黒曜石の産出地を明らかにするために、電子プロンプマイクロナライザー（EPMA）を用いた主成分化学組成の分析が実施されている（和田 2002）。Ⅱ期からⅣ期までに帰属する試料の分析が実施されているが、その結果によれば、通して置戸産が多用されているものの、Ⅲ期のとりわけ宇津内Ⅱb 式期においては白滝産の増加が認められるという。置戸産に由来するものが多いという分析結果は、常呂川河口遺跡の位置からみて容易に首肯できるが、白滝産の利用が認められる時期があるという点は興味深い。

旧白滝 8 遺跡出土の資料に関しては、蛍光 X 線分析法による産出地推定分析が試みられている（藁科 2004）。続縄文時代に帰属する試料の分析結果によれば、あじさい滝や赤石山が多く認められ

たため、遺跡近傍の幌加湧別川での採集が推定されている。ただし、1点だけ所山（置戸）と推定されたものがあり、製品の状態で搬入が想定されている（直江 2004：213）。

Ⅳ期の段階になって利用される黒曜石の産出地に変化が生じているのか否かは、分析事例がないため現時点では不明である。そのため、時期に応じて利用される黒曜石の産出地に違いがあったのか否かについては、現段階では言及が困難である。Ⅳ期・Ⅴ期の石器群における産出地推定のデータ蓄積がとくに望まれるところである。

磨製石斧には、緑色・青色片岩やカンラン岩、硬質頁岩、緑色泥岩等の利用が認められる。とくに片岩やカンラン岩の利用が多い。磨製石斧に利用されている石器石材のうち、片岩に関しては合地らの分析結果にもとづけば、神居古潭変成帯に産出地が求められる（合地 2000、齋藤他 2006）。カンラン岩も同様の産出地に由来する可能性が高い。この産出地は、距離的に最も遠い知床半島や根室半島の遺跡からみると、直線距離で約250～300 km 離れていることになる。

礫石器類には砂岩や泥岩、礫岩、安山岩等の利用が認められる。釧路地域や網走地域内での石器石材に適した堆積岩の産状や分布に関する記載例が少ないため、これらの産出地については詳細が不明である。

他地域の続縄文時代石器群における石器石材組成との異同という点で注目すべきは、第一に、Ⅰ期からⅤ期まで剥片石器においては黒曜石が主体的に利用されており、そうした傾向は遺跡周辺の（硬質頁岩の産出層が遺跡近傍にあるのか否かといった）石器石材環境に大きく左右されてはいなかったことである。こうした現象は、Ⅰ期からⅢ期前半まで、黒曜石をはじめとして硬質頁岩やチャート、メノウといった多様な石器石材が利用され、それ以降、黒曜石利用に収斂していつている石狩低地帯北部の状況（高倉 2006a）とは大きく異なる。石狩低地帯北部の遺跡から出土する削器や有柄石器のような大形の剥片石器には、硬質頁岩やチャート、メノウ等の石器石材が利用される傾向があり、製作しようとする器種のサイズと石器石材の選択には対応関係が認められる。北海道東部において硬質頁岩がほとんど利用されなかった理由の一つは、白滝産や置戸産の黒曜石を用いることによってサイズの大きい器種の製作も十分に可能になる、という点が関係しているのではないかと考えられる。

第二に、自然面の観察による原石形状の推定にもとづくと、Ⅲ期から次第に黒曜石の採集ゾーンが河川の上流域を含めたものから中・下流域へと変化し、Ⅳ期以降、そうしたゾーンの利用が一般化したと考えられる。このような黒曜石採集ゾーンの変化は、石狩低地帯北部で確認されている状況とも共通しており、全道一円で起こった現象である可能性が高い。このことは、次章で論じる、剥片石器の素材供給にしめる両極打撃法の比重の高まりという現象とも連動しているものとみられる。

Ⅳ. 石器製作工程の復元

Ⅳa. 続縄文時代前半期の石器製作工程

石器群における石器製作工程の検討をおこなうためには、石核や剥片、ツールのそれぞれが量的にまとまって存在し、なおかつそれら相互間に接合関係がある資料体を取り扱っていくのが望ましい。しかし、北海道東部における続縄文時代の石器群において、そうした条件を満たしている資料体は決して多くはない。オホーツク海や太平洋の海岸（湖沼含む）に沿った海岸段丘上や砂丘上に立地している遺跡の多くでは、複数の竪穴住居址が検出されていることから、相対的に長期の

居住活動が営まれていた集落址と考えられるが、これらの遺跡から石核や接合資料が確認されることは稀である。ここでは、多くの石核や接合資料が検出されているので注目される、湧別川によって形成された河岸段丘上に立地する遠軽町内の旧白滝8遺跡Ib層・Ia層、栄野1遺跡、新野上2遺跡の出土石器群（いずれも縄文時代の前半期に帰属する）をみていくことにしよう（図5）。

旧白滝8遺跡のIb層とIa層から出土した石器群では、石核からの剥片剥離の工程には、15～20 cm 程度の大きさの転礫・角礫を原材とし、①初期の段階に厚手で大形の剥片が剥離された後、打面を固定して剥離が進められ、その後は打面転移が繰り返されているもの、②舟形の原石形状を利用して打面を固定し、正裏面で剥離がおこなわれているもの、③端部での交互剥離によって剥片が剥離されているもの、④端部での交互剥離の後に頻繁な打面転移をおこなっているものの4類型が認められた（直江 2004：212）。こうした工程から剥離された剥片が剥片石器の素材となっていたと考えられる。

それ以外に両面調整石器製作工程⁹⁾も認められた。この工程には、原石をそのまま素材として利用しているものと、分割剥片を利用しているものの二者が認められ、10～15 cm 程度の大きさの両面調整石器（図5-1～3）が作出されている。

栄野1遺跡と新野上2遺跡の石器群における剥片剥離工程は、主に長径が10～25 cm 程度の大きさの転礫、一部では角礫を原材として、①片面もしくは両面で求心状に剥片が剥離されているもの（I・II類：図5-8～10）とその初期段階を示すと考えられる原石に両極打撃が加えられているもの（V類：図5-15）、②端部で打面と作業面を入れ替えながらチョッピング・ツール状に剥片が剥離されているもの（III類：図5-11～12）、③打面を固定し、剥離は一方方向に進められ、裏面に自然面が残されているかもしくは作業面が全周しているもの（IV類：図5-13）が認められた。III類・IV類には10 cm 程度のより小形の原石が利用されているのに対し、それ以外では大きさが10 cm を越す、より大形の原石が利用されている。III類とIV類の石核に関しては、縄文時代に帰属するものも含まれていた可能性が指摘されている（鈴木宏 2005：123-5）。

こうした剥片剥離の工程以外に、両面調整石器（図5-4～6）製作工程の存在も把握されている。素材として剥片や分割剥片を利用しているものが多いが、サイズからみて原石から直接作出されているものもあると想定できる。また、サイズや表裏の剥離面の状態からみて、V類石核が両面調整石器と工程的に連結する可能性も想定されている（鈴木宏 2005：124）。両面調整石器の製作工程から剥離された剥片は、背面の剥離方向の構成からみて、剥片石器（例えば搔器や削器）の素材となっていた可能性がある。

旧白滝8遺跡と栄野1遺跡・新野上2遺跡から得られた石器群との間では、製作されている両面調整石器のサイズや器種構成に違いが見出され、それらは遺跡で実施されていた石器製作作業の段階差に由来する可能性がある。しかし、基本的な石器製作工程に関しては、共通している点が多いものと理解される。

三遺跡から出土した石器群において注目されるのは、第一に、石狩低地帯北部の石器群ではそれ程顕在化していない両面調整石器製作工程が量的にまとまって確認されたことであろう¹⁰⁾。石器群を構成する器種のうち、両面調整石器や一部の尖頭器、有柄石器等が、この工程からもたらされているものと考えられる。両面調整石器どうしの間では、剥離面の細かさの程度にばらつきが認められるので、より原材・素材の段階に近いものも含まれているのであろう。

小形（長さがおよそ5 cm 以下）の両面調整石器や尖頭器、有柄石器は、栄野1遺跡や新野上2遺跡でI・II類と分類されている求心状の石核（一部に大形の両面調整石器）から剥離された厚手の



図5 湧別川流域の遺跡から出土した縄文時代石器群
 1～3・14：旧白滝8遺跡、4～13・15：新野上2遺跡

剥片が素材となっている可能性が高い。また、両面調整石器製作工程は、表裏で平坦な剥離をおこなない、結果的にそれによって器厚が減じられているという点で、求心状に剥片剥離が進められている石核との間に技術的な関連性が見出せる。求心状の剥片剥離作業が進行した結果、それがさらに一定の形状をもった中・大形の両面調整石器等に変形していった状況も推定されよう。ただし、大形（長さがおおよそ 10 cm 以上）の両面調整石器に関しては、そのサイズや形状を勘案すると、剥片剥離の工程とは相互に区別されていた可能性が高いと考えられる。

注目される第二の点は、石狩低地帯北部の続縄文時代石器群において、ツール（石鏃や石錐等の小形の剥片石器）の素材供給に重要な役割をはたしていた両極打撃法（高倉 2005a、2006b）に関連する資料群が、これらの石器群では量的にまとまって認められなかったことである。もちろん、栄野 1 遺跡や新野上 2 遺跡では、剥離面の一部に原石からの分割・粗割時に適用された両極打撃法の痕跡をとどめている石核があり（図 5-10・13・15）、また楔形石器の組成が認められることからみても、遺跡内での石器製作作業として両極打撃法が実施されていたことはまちがいない。両面調整石器製作工程においても原石を分割・粗割する過程では、主に両極打撃法が適用されていたようである（例えば図 5-6 の原石からの分割時の剥離面は、両極打撃法によるものである可能性が高い）、その後の剥離作業の進行過程でも、ときに両極打撃法によって剥離がおこなわれていた可能性は否定できない。しかし、石器群における剥片石器の主な素材供給は、残置している素材面の観察にもとづくと、削器等のわずかな剥片石器を除けば、石核からのフリーフレイキング¹¹⁾による剥片剥離によってもたらされていたと理解される。

紙数の制約からここでは個別の資料提示ができないが、石器製作工程に関する基本的な諸特徴は、上述の三遺跡以外にも、本稿で検討対象として取り上げた続縄文時代前半期の石器群においては共通して認めることができる。

IVb. 遺跡間での石器製作作業の変異

前半期石器群に関しては、遺跡内で実施されていた石器製作作業の内容が、遺跡間で大きく相違している点が認められるので、ここで言及しておきたい。

太平洋やオホーツク海（湖沼含む）沿いで発見・発掘されている集落遺跡の石器群では、石核の出土事例がきわめて少ない。岐阜第三遺跡 14・20 号竪穴の床面出土遺物のような事例がいくつか指摘できるのみである。したがって、湧別川流域の旧白滝 8 遺跡、栄野 1 遺跡、新野上 2 遺跡で確認されたのと同様の剥片剥離作業が、それらの遺跡においても展開されていたとは考えにくい。これらの遺跡から出土した剥片石器は、素材（剥片）やツールの状態で持ち込まれていたことが推定される（鈴木宏 2005：126）。両面調整石器製作工程に関しては、沿岸部の遺跡において、栄野 1 遺跡や新野上 2 遺跡の報告書（鈴木宏 2005）で I・II 類とされた求心状石核の出土例が少ないこと、あるいは両面調整石器の素材に適する大形剥片の出土点数自体も少ないことを勘案すると、剥離作業が相当に進行した状態でそれらの遺跡に持ち込まれていたことが推定される。ただし、常呂川河口遺跡のピット 328 出土石器群のように、両面調整石器製作工程による剥離作業の実施で中・大形の剥片がまとまって剥離されていたことを示す資料もあり、遺構単位での作業の発現状況には変異が認められる可能性がある。いずれにしても、旧白滝 8 遺跡、栄野 1 遺跡、新野上 2 遺跡から出土している石器群のなかに初期段階に近い両面調整石器が含まれているのとは対照的である。

当該期の石材消費形態は、石核からの剥片剥離の工程においても、両面調整石器製作工程においても、旧白滝 8 遺跡、栄野 1 遺跡、新野上 2 遺跡のような石材の産出地により近い遺跡と沿岸部に

立地する集落遺跡とを相互に組み合わせることによって、その全体像が理解できるといえよう。こうした遺跡間の関係性は、今のところ北海道中部では確認されておらず、北海道東部での特異な展開を示している可能性が指摘できる。

IVc. 続縄文時代後半期の石器製作工程

次に続縄文時代後半期（Ⅳ～Ⅴ期）の石器群における石器製作工程を概観していきたい。

北海道東部でのⅤ期の石器群としては、釧路地域のノトロ岬遺跡で良好な一括資料が検出されているので、比較的実態が明らかとなっている。ノトロ岬出土石器群については、すでに取り上げて言及したことがあるので、別稿（高倉 2008）を参照していただきたい。要点をまとめると、①剥片石器に関しては、小形の黒曜石の転礫を原材とし、②両極打撃法もしくはフリーフレイキングを適時互換的に適用しながら剥離作業が進められ、③産出された剥片や楔形石器を素材として搔器が主に作出される、④器種に応じた原材の使い分けや素材の作出工程の異なりは認められない、⑤両面調整石器を作出する工程はみられない、ということになる。剥片石器以外には礫石器が検出されているだけで、磨製石斧は認められない。

伊茶仁チシネ第一堅穴群遺跡の出土石器群をみる限り、Ⅳ期の石器群においても上述の諸特徴は基本的に認められると見てよい。小形で薄手の石鏃がわずかに認められるだけで、Ⅲ期の後北C1式期まで認められた両面調整石器製作工程は確認できない。ただし、石器群に石鏃、削器や磨製石斧が組成していることにあわせ、剥片剥離の工程に限って言えば、やや大形の剥片もまとまってフリーフレイキングによって剥離され、剥片石器の素材とされているのが注意されよう。北海道中部のⅣ期石器群では、搔器や石鏃といった小形のツールと削器等のやや大形のツールは、別個の系列にしたがって製作されていた可能性が指摘されているが（高倉 2008）、資料的な制約から、この点についての北海道東部でのあり方の詳細な解明は、今後の課題となっている。

以上のような石器製作工程の諸特徴のなかでも、ツールの素材供給において両極打撃法がより重要な位置をしめていることは、とりわけ注目されよう。それは、前半期から後半期にかけての器種組成の変化（ツールのサイズの全体的な小形化・種類の減少化）や黒曜石の小形転礫利用の増加とも連動した現象とみられる。他地域においても、こうした連動にもとづいた諸現象の変化が確認されており（高倉 2006a）、前半期と後半期の石器群を北海道全域で分ける重要な指標になるものと考えられる。

V. まとめと課題

ここまで、北海道東部の続縄文時代石器群における器種組成、石器石材組成、石器製作工程の時間的変遷を検討するとともに、石器群のライフヒストリーの観点からその対応関係がどのようにに理解できるのか、についても議論をおこなってきた。本章では、ここまでの検討結果を整理するとともに、それが続縄文時代研究の全般に対して今後どのような検討課題を提起するのかについても述べていきたい。

北海道東部の石器群で確認された諸特徴を他の地域のそれと比較すると、地域固有の石器石材環境に強く規定されやすい石器石材組成は別としても、いくつかの差異を確認することができる。とくに前半期の石器群から見出された石器製作工程の諸特徴は、明らかに石狩低地帯北部の同段階の石器群とは異なる傾向を示している。北海道東部の前半期石器群において特徴的に認められた両面

調整石器製作工程の存在のあり方は、利用されている石器石材が黒曜石ではなく硬質頁岩であるという違いはあるが、北海道南西部（渡島半島および噴火湾東岸域）の同段階の石器群との間に多くの共通点を有していると評価できる。

この問題については、北海道南西部の続縄文時代石器群が本稿の検討対象外であるため詳しく触れることはできないが、土器型式からみて北海道南西部・北海道中部・北海道東部の南部・北海道東部の北部・北海道北部という形で一般的に整理されてきた続縄文時代前半期の地域性の区分（例えば藤本 1982、高橋正 1984）は、石器群からみると異なるブロックに統合して整理できる余地があることを示唆している。石器群と生業形態とのかかわりという課題も含め、この点については今後、あらためて議論する機会をもちたい。

北海道東部内での石器群の通時的な変化に関しては、剥片石器に黒曜石を利用し続けるという傾向が時期を問わず変化していないことを確認してきたが、器種組成や黒曜石の採集ゾーン、石器製作工程の諸特徴に関しては、続縄文時代の前半期と後半期との間（Ⅲ期とⅣ期の間）で大きな変化が生じていることが明らかとなった。

器種組成の変化だけに焦点をあわせると、Ⅱ期とⅢ期の間、もしくはⅣ期とⅤ期の間にも変化は見出さる。そこからは、Ⅱ期からⅤ期にかけての“漸移的な変化”という像が引き出されることになる。しかし、両面調整石器製作工程の消失や剥片石器の素材供給における両極打撃法の比重の増加、利用原石の小形化・転礫黒曜石利用の増大といった石器群にかかわるさまざまな現象が、ライフヒストリーの観点からみて相互に連動しながら共時的に変化している状況を勘案すると、Ⅲ期とⅣ期の間の差異は、他の時期の変化と比較して、より根底的な変容を反映している可能性が高いのではないかと考えられる。それぞれの時期ごとの石器群の差異の要因に関しては、別様の説明がなされるのが望ましいといえよう。変化の説明にあたっては、当然ながら自然環境のデータや生業、居住形態等の問題との対応関係を吟味することが求められるが、本稿で示したような考古学的記録の形成過程（石器群のライフヒストリーへの着眼もその一つである）に関する基礎的な整理作業を経由することによって、現象間の関連性もふまえたより確度の高い議論が提示可能になろう。

本稿では、石器群間での器種組成や石器石材組成の比較を、定性的なレベルで進めてきた。しかし、石器群間の変異を精査し、石材消費形態等の問題を本格的に論じていくためには、定量的なデータにもとづいた分析が必要であることはいうまでもない。多数の遺構が重複するという本地域（とくにオホーツク海や太平洋沿岸の海岸段丘上や砂丘上に立地する集落遺跡に関しては）の遺跡の内実からみて、そうした定量的なデータの提示が煩雑で困難なことは容易に推察される。どの単位で集計すればよいのかを含め、今後、石器群の記載・比較にかかわる方法的な課題として議論していく必要性があろう。

註

- 1) “ライフヒストリー”とは、石器の原材料となっていた岩石・鉱物にはじまり、最終的に遺跡へ石器が放棄されるにいたる変化の総体を指す用語である（阿子島 1984）。
- 2) 周知のように、続縄文時代前半期においては、北海道南西部や北海道中部、北海道東部（釧路地域と網走地域）といった地域どうしの間で、異なる土器型式の分布が認められる。それに対し、後半期になると後北 C 2-D 式土器の全道的な分布に表れているように、地域間での土器型式の差異が消失し、斉一化が進行するとの理解が提示されている（例えば木村 1976、大沼 1982、藤本 1982、高橋正 1984）。ただし近年では、土器の検討から、後半期においても時期によっては地域間で差異が顕在化することが

- 具体的に指摘されており、注意を要する（熊木 2001）。
- 3) 対象とする遺物群が遺構（例えば竪穴住居址や土坑）から出土したのか否かは、ここでは問わない。いわゆる包含層出土の遺物群でも、包含されている堆積物の堆積環境や出土遺物群の帰属の時間幅を考慮することで、有意な検討対象となりえるかどうかの判断が可能となる。
 - 4) 筆者は、縄文時代の石器群を構成する器種の定義について（全てを網羅しているわけではないが）、K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の報告書（高倉 2004：30-1）のなかで述べた。器種認定でとくに問題となるのが、筆者のいう尖頭器、両面調整石器、有柄石器の取扱いであろう。従来、これらの石器については、「ナイフ」、「ナイフ状石器」、「つまみ付きナイフ」、「靴形石器」、「石銛」、「石槍」等さまざまな名称が付され、分類されてきた。しかし、相互の技術形態学的な差異が明示的に把握できるような体系的分類がなされてこなかったために、共通の器種認識が形成されるのを阻んできたことは否定できない。
 - 5) ただし、北海道央部のⅣ期の石器群で確認されている搔器の量比の高さは、北海道東部では確認されていない。この問題については、今後あらためて検討する必要がある。
 - 6) 竪穴住居址の覆土から帰属時期が複数にまたがる土器群が検出されている場合は、床面出土といっても石器群の帰属時期認定には一定の注意が必要であろう。異なる遺構でも繰り返し同様の傾向が確認できるのかどうか、判断のうえで重要な意味をもつ。
 - 7) 両面調整石器や削器、有柄石器の組成といった、後北 C 1 式土器に伴う石器群に認められる諸特徴は、浦幌町十勝太若月遺跡の土坑 36・82（石橋他 1975）や常呂川河口遺跡のピット 46・890・1350・1351 等、墓坑から出土した資料においても確認できる。
 - 8) 黒曜石の転礫利用がⅢ期から増加していることは、とりわけ釧路地域の石器群（三津浦遺跡出土石器群等）において観察できる。
 - 9) 平行だが、対向する二側縁からの平坦な剝離が石器の表裏でなされる工程のことを“両面調整石器製作工程”と呼ぶ。それは、平坦な剝離が器体の表裏でなされ、剥片が剝離されているという点で求心状の石核での剝離工程と共通点を有するが、剝離作業の進展に応じその都度“平行だが、対向する二側縁”が現出されているという点に相互の違いが見出せよう。
 - 10) 石狩低地帯北部のⅠ期とⅡ期の石器群においても、両面調整石器の製作工程に関連する尖頭器や（両面調整の）有柄石器の組成は認められる（高倉 2005a）。しかし、北海道東部の状況と比較すると、器種組成にしめるその量比が低いことは明らかであり、また両面調整石器製作工程と技術的な関連性を示す大形の求心状石核の出土例に限られている。
 - 11) フリーフレイキングとは、割ろうとする石核の下面・下縁を台石等に接着・固定せず、加撃面に対して垂直よりも鋭角の方向から加撃をおこない、剝離作業を進めていくものである。その亀裂過程は、多くがヘルツ型や曲げ型の亀裂発生—剛性制御の伝播過程（山田・志村 1989）を示すものと考えられる。

引用文献

阿子島香

1984 「不定形石器分析の視点」『文化』47（3・4）：24-45 頁

石井 淳

1998 「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439：15-20 頁

石橋次雄・山口 敏・後藤彦彦・河村七五三喜

1975 『十勝太若月遺跡 — 第三次調査 —』浦幌町教育委員会

上野秀一

1982 「2. 縄文文化 石器」加藤晋平・小林達雄・藤本 強編『縄文文化の研究 6 縄文・南島文

- 化』：115-127 頁、雄山閣
- 宇田川洋編
1975 『幾田』羅臼町教育委員会
- 大沼忠春
1982 「2. 続縄文文化 道央地方の土器」加藤晋平・小林達雄・藤本 強編『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』：75-93 頁、雄山閣
- 岡崎由夫・澤 四郎・富水慶一・藤村久和
1963 「北海道阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡発掘報告」澤 四郎編『北海道阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯』：5-44 頁、阿寒町教育委員会
- 加藤邦雄
1992 「伝統文化と新来の文物」須藤 隆・今泉隆雄・坪井清足編『新版日本の古代 9 東北・北海道』：427-448 頁、角川書店
- 川上 淳編
1994 『根室市コタンケシ遺跡発掘調査報告書』根室市教育委員会
- 木村英明
1976 「続縄文時代の生産用具 ― 定形的な刃器出現の意味するもの ―」『どるめん』10：17-32 頁
- 熊木俊朗
2001 「後北 C 2・D 式土器の展開と地域差 ― トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位 (2) ―」東京大学大学院人文社会系考古学研究室・常呂実習施設編『トコロチャシ跡遺跡』：176-217 頁、東京大学大学院人文社会系研究科
- 2003 「道東北部の続縄文文化」野村 崇・宇田川洋編『新北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』：50-69 頁、北海道新聞社
- 合地信生
2000 「常呂川河口遺跡から出土した石斧の産地について」武田 修編『常呂川河口遺跡 (2)』：308-319 頁、常呂町教育委員会
- 齋藤 岳・合地信生・森岡健治・葛西智義・松本建速
2006 「縄文～続縄文時代における北海道中央部から東北地方への緑色・青色片岩製磨製石斧の流通 ― 考古学的・岩石学的検討 ―」『日本考古学協会第 72 回総会研究発表要旨』：53-56 頁、日本考古学協会
- 澤 四郎
1974 「第四章 縄文文化から続縄文文化へ」『新釧路市史 第 1 巻』：217-247 頁、釧路市
- 澤 四郎編
1978 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ』釧路市郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター
1979 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ』釧路市郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター
- 澤 四郎・西 幸隆編
1976 『釧路市三津浦遺跡発掘報告』釧路市郷土博物館
1977 『釧路市興津遺跡発掘報告』釧路市郷土博物館
- 梶田光明編
1982 『標津の竪穴Ⅴ』標津町教育委員会
1992 『伊茶仁チシネ第一竪穴群遺跡』標津町教育委員会
- 鈴木 信
2003 「3 道央部における続縄文土器の編年」三浦正人・鈴木 信・吉田裕吏洋編『千歳市 ユカンボシ C 15 遺跡 (6)』：410-452 頁、財団法人北海道埋蔵文化財センター

- 2004 「古代北日本の交易システム——北海道系土器と製鉄遺跡の分析から——」宇田川洋先生華甲記念
論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立』：65-97 頁、北海道出版企画センター
- 鈴木宏行
2005 「3 石器」『遠軽町栄野1・新野上2遺跡』：123-126 頁、財団法人北海道埋蔵文化財センター
仙庭伸久
1998 「石狩低地帯における石器製作の下限とその形態」『考古学ジャーナル』433：2-8 頁
- 高倉 純
2003 「北海道の更新世末における石材消費形態からみた遺跡間変異の検討——北海道東部、十勝平野の
石器群を検討対象とした予察——」堤 隆編『日本の細石刃文化Ⅱ——細石刃文化研究の諸問題
——』：132-151 頁、ハッ岳旧石器研究グループ
- 2004 「Ⅲ-2 石器」小杉 康・高倉 純・守屋豊人編『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点
発掘調査報告書Ⅰ』：30-31 頁、北海道大学
- 2005a 「Ⅷ章 K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点出土石器群に関する予察」小杉 康・高倉
純・守屋豊人編『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ』：96-107 頁、
北海道大学
- 2005b 「十勝平野周辺域における石器石材の分布と産状（1）」『帯広百年記念館紀要』23：25-34 頁
- 2006a 「石狩低地帯北部の続縄文時代石器群」林 謙作編『ムラと地域の考古学』：147-171 頁、同成社
- 2006b 「北海道の続縄文時代石器群における両極打撃法の意義」『考古学ジャーナル』547：16-19 頁
- 2008 「続縄文時代石器群の変遷と鉄器化との関係」『続縄文文化とは何か』：20-28 頁、北海道考古学会
- 高橋和樹・鈴木宏行・直江康雄
2005 『遠軽町栄野1・新野上2遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 高橋和樹・鈴木宏行・直江康雄・立田 理
2004 『白滝遺跡群Ⅴ』財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 高橋正勝
1984 「北海道中央部の続縄文時代——江別の恵山式土器群と江別太・坊主山式土器群——」野村 崇編
『北海道の研究 第1巻（考古篇Ⅰ）』：355-384 頁、清文堂
- 武田 修
2006 『日本の遺跡 13 常呂遺跡群 先史オホーツク沿岸の大遺跡群』同成社
- 武田 修編
1988 『TK 67 遺跡』常呂町教育委員会
1995 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
1996 『常呂川河口遺跡（1）』常呂町教育委員会
2000 『常呂川河口遺跡（2）』常呂町教育委員会
2002 『常呂川河口遺跡（3）』常呂町教育委員会
2004 『常呂川河口遺跡（4）』常呂町教育委員会
2005 『常呂川河口遺跡（5）』常呂町教育委員会
2006 『常呂川河口遺跡（6）』常呂町教育委員会
2007 『常呂川河口遺跡（7）』北見市教育委員会
- 立田 理編
2007 『白糠町 上茶路遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 東京大学考古学研究室編
1972 『常呂』東京大学文学部
東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編

- 1977 『岐阜第三遺跡』 東京大学文学部
1985 『栄浦第一遺跡』 東京大学文学部
富水慶一・澤 四郎
1966 「河原遺跡調査報告」富水慶一編『北海道白糠町の先史文化 第一輯』：13-18 頁、白糠町教育委員会
直江康雄
2004 「Ⅷまとめ 1 旧白滝 8 遺跡について」『白滝遺跡群Ⅴ』：211-213 頁、財団法人北海道埋蔵文化財センター
藤本 強
1982 「2. 続縄文文化 続縄文文化概論」加藤晋平・小林達雄・藤本 強編『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』：10-20 頁、雄山閣
松田 功
1993 『オンネベツ川西側台地遺跡』 斜里町教育委員会
松田 功・荻野幸男・村上義直
1995 『オシャマップ川遺跡』 斜里町教育委員会
山田しょう・志村宗昭
1989 「石器の破壊力学 (2)」『旧石器考古学』 39：15-30 頁
山本文男編
1984 『ノトロ岬』 音別町教育委員会
横山英介
1988 「擦文時代の剥片石器・剥片とその評価 ― 加工具にみられる鉄器化の完了について ―」『考古学研究』 35(3)：11-31 頁
和田恵治
2002 「電子プローブマイクロアナライザー (EPMA) による石器黒曜石ガラスの主成分化学組成」武田修編『常呂川河口遺跡 (3)』：429-432 頁、常呂町教育委員会
藁科哲男
2004 「Ⅶ自然科学的分析等 2 旧白滝 8・下白滝遺跡出土の黒曜石製石器の原産地分析・水和層測定」『白滝遺跡群Ⅴ』：188-205 頁、財団法人北海道埋蔵文化財センター

Lithic Assemblages of the Epi-Jomon in Eastern Hokkaido

Jun TAKAKURA

Graduated school of letters, Hokkaido University

The Epi-Jomon period of Hokkaido, northern part of the Japanese islands, ranges from 2,500 to 1,300 radiocarbon yr BP. Probably, it was parallel to the Yayoi and Kofun periods of Honshu, central part of the Japanese islands. Broadly speaking, the Yayoi and Kofun periods were characterized by the rapid spread and development of rice cultivation. On the contrary, the Epi-Jomon shows a unique socio-ecological adaptation of Hunter-Gatherers in Hokkaido. In order to examine the appearance and transformation of the Epi-Jomon society, it is important to discuss inter-regional interactions in and around Hokkaido, in relation to the introduction of iron tools from Honshu. Surely, studying the lithic assemblages of Epi-Jomon can contribute to reveal such issues.

The purpose of this paper is to present the temporal variability of lithic assemblages of the Epi-Jomon in Eastern Hokkaido, and to discuss its significance. In this paper, I attempt to assess the composition of stone tools and lithic raw materials, and to examine the lithic reduction sequences.

In general, the Epi-Jomon is divided into two chrono-cultural subdivisions: Early and Late. The stone tools of the Early Epi-Jomon in Eastern Hokkaido are usually composed of stone arrowheads, bifacial tools, points, tanged stone scrapers, side scrapers, end scrapers, drills, piece esquillee, polished axes, various pebble tools (stone hammers, whetstones, anvil stones, polishing stones and saddlequerns). On the other hand, some of these tools (stone arrowheads, bifacial tools, points, tanged stone scrapers, side scrapers, drills and polished axes) have drastically decreased or disappeared among the lithic assemblages of the Late Epi-Jomon. In addition, bifacial reduction sequences which characterized the lithic assemblages of the Early Epi-Jomon in Eastern Hokkaido have also disappeared among the Late Epi-Jomon. In the lithic assemblages of the Late Epi-Jomon, it is interesting to note that bipolar technique has played an important role of producing blanks of small flake tools, such as end scrapers.

As a result, my assessment shows that many phenomena have coincidently changed between Early phase and Late phase of Epi-Jomon. It suggests that the typological and technological difference of lithic assemblages of the Epi-Jomon probably correlates with the chrono-cultural subdivisions.